



TITLE:

舌転移をきたした腎細胞癌の1例

AUTHOR(S):

稲井, 徹; 香川, 征; 淡河, 洋一; 秋山, 欣也

CITATION:

稲井, 徹 ...[et al]. 舌転移をきたした腎細胞癌の1例. 泌尿器科紀要 1987, 33(8): 1240-1243

ISSUE DATE:

1987-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119230>

RIGHT:

舌転移をきたした腎細胞癌の1例

徳島大学医学部泌尿器科学教室（主任：黒川一男教授）

稲井 徹・香川 征・淡河 洋一・秋山 欣也

A RENAL CELL CARCINOMA WITH METASTASIS
TO THE TONGUE

Tohru INAI, Susumu KAGAWA, Yoichi AGA and Kinya AKIYAMA

*From the Department of Urology, Tokushima University, School of Medicine
(Director: Prof. K. Kurokawa)*

A 42-year-old man had rapidly progressing metastasis to the tongue 3 months after nephrectomy due to renal cell carcinoma. He visited an otolaryngeal clinic with the chief complaint of bleeding and pain on his tongue. Biopsy of the tongue revealed metastasis from the renal cell carcinoma.

After treatment with radiation and chemotherapy, the tongue tumor was disappeared macroscopically.

Renal cell carcinoma metastasizing to the tongue is rare. Statistical studies on the report of metastasis to the tongue of renal cell carcinoma are reviewed.

Key words: Renal cell carcinoma, Tongue metastasis

緒 言

腎細胞癌の転移は、肺、リンパ節、骨などに多く、舌への転移は稀であり報告も少ない。今回、腎摘後3カ月で舌転移・肺転移をきたした症例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：42歳、男性、会社員

主訴：舌部の出血、疼痛

家族歴・既往歴：特記すべき事項なし

現病歴：1985年4月、無症候性肉眼尿血を主訴として当科を受診し、IVP (Fig. 1), CT (Fig. 2) などの精査の結果、左腎細胞癌の診断で経腹膜の腎摘除術を受けた。病理組織検査では renal cell carcinoma, solid type, pleomorphic type, grade 3, INF γ と診断された。その後、外来で UFT を投与し経過観察を行っていた。

1985年8月、左口腔内の出血、疼痛が出現したので、某耳鼻科を受診したところ舌腫瘍の疑いにて当院耳鼻科を紹介された。

現症：身長 165.5 cm, 体重 72 kg, 栄養中等度、血

圧120～90、脈拍78 分整。顔面に異常なく、口腔内は、舌根部左側に黄褐色の潰瘍があり、その周囲は固く隆起がみられた。頸部にリンパ節の腫脹なく、理学的には胸部にも異常は認められなかった。

入院時検査所見

尿検査：異常なし。検血：WBC 7,700/ μ l, RBC 505 \times 10⁴/ μ l, Hb 12.5 g/dl, Ht 40.9%, 血小板 28 \times 10⁴/ μ l, 白血球分類 正常。血液生化学検査：GOT 12 IU/l, GPT 25 IU/l, LDH 148 IU/l, TBI 0.3 mg/dl, AlP 8.1 KAU, T-P 7.3 g/dl, BUN 16 mg/dl, Cr 1.5 mg/dl, Na 142 mEq/l, K 4.6 mEq/l, Cl 107 mEq/l, Ca 9.6 mg/dl, P 2.7 mg/dl, ESR 5/h 16/2h, CRP (—)。

耳鼻科検査

間接喉頭鏡で、腫瘍は黄褐色、直径約 3 cm で、表面は不整で白苔に覆われて、喉頭上方 1 cm のところまで広がっており、確定診断のために生検を行なった (Fig. 3)。HE 染色では、正常重層扁平上皮の下に密に、円形の細胞を主体とする腫瘍細胞の増殖を認め (Fig. 4 右側)、原発性舌癌は扁平上皮癌が大部分であり、転移性腫瘍が疑われたため、腎細胞癌の病理組織 (Fig. 4 左側) と比較検討したところ転移が疑

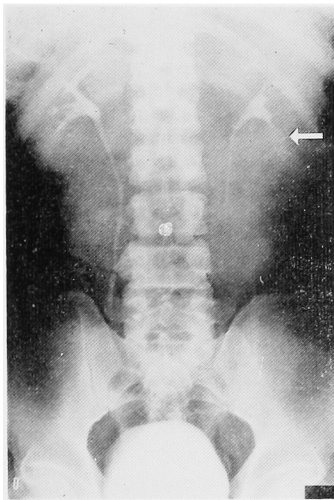


Fig. 1. IVP shows small SOL in lower calyx of the left kidney.

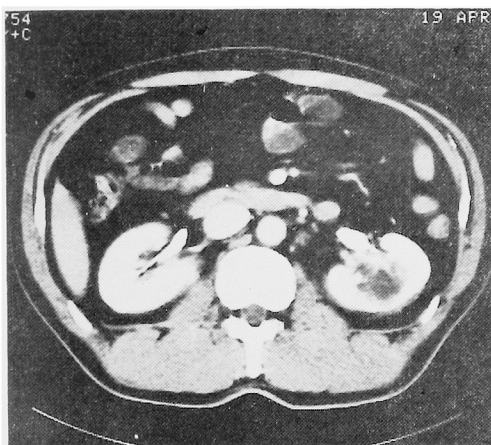


Fig. 2. Enhanced CT shows left renal mass.

われ、さらに PAS 染色標本 (Fig. 5) にても明るい豊富な細胞質をもつ腫瘍細胞からなり、PAS で顆粒状に染まるグリコーゲンが原発巣、転移巣ともに多数認められたため、原発巣は腎細胞癌で舌腫瘍はその転移と診断した。

経過

腎摘時、すなわち4カ月前には肺転移は認めなかったが、胸部断層、胸腹部 CT にて、両肺に直径約 1 cm の多発性転移像を認めた。なお、腎摘除術を行なった左腹部に局所再発は認めなかった。

これらのことから、舌転移部に対して根治的手術は適応とならず、舌転移に対しては放射線療法を左右対向 2 門 200 rads/day にて合計 5,000 rads を施行すると同時に adriamycin 40 mg, cisplatin 50 mg, cyclophosphamide 1,000 mg を 1 コースとする 3 者

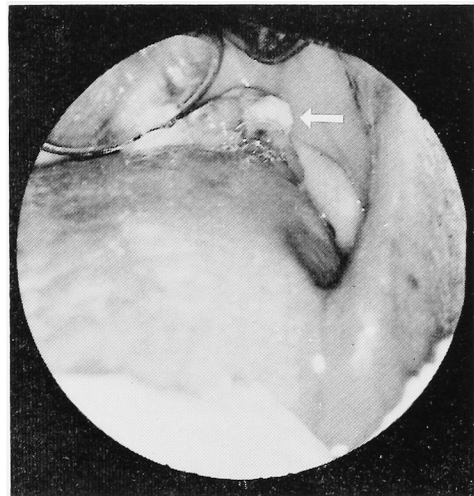


Fig. 3. Gross appearance of the metastatic renal cell carcinoma to the tongue (before radiation therapy).

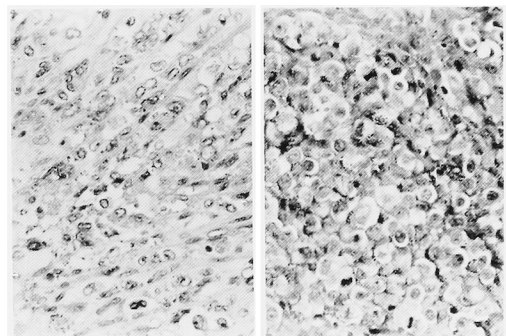


Fig. 4. H-E stain. Left renal cell carcinoma (left half) and biopsy of the tongue tumor (right half).

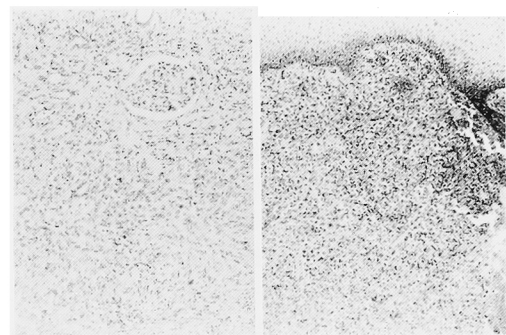


Fig. 5. PAS stain. Left renal cell carcinoma (left half) and biopsy of the tongue tumor (right half).

併用化学療法を 4 コース実施した。

以上の保存的治療にて舌転移巣は肉眼的には完全に消失した (Fig. 6)。一方、肺転移巣は変化が認めら

れず、肺転移巣に対する治療としてインターフェロンの投与を行なったが、1986年3月に呼吸不全のため死亡した。

考 察

転移性舌腫瘍の頻度は、Weitzner¹⁾によれば悪性腫瘍患者の剖検1,000例に1例(0.1%)みられるとしており、Zegarelli²⁾によると、悪性腫瘍の剖検7,000例中15例(0.2%)であると報告している。また、Friedlander³⁾によれば、口腔内悪性腫瘍の中で転移性腫瘍の割合は約1%で、そのうち、90%は顎(下顎骨72%, 上顎骨18%)で残りは10%(舌5%, 頬3%, その他2%)と述べている。Weitzner¹⁾らは転移性舌腫瘍における腎細胞癌の頻度は15例中3例(20%)としている。一方、里見⁴⁾によると腎細胞癌における舌転移の頻度は腎細胞癌124例中1例(0.8%)であるとしている。

われわれの集計では、腎細胞癌の舌転移の報告は少

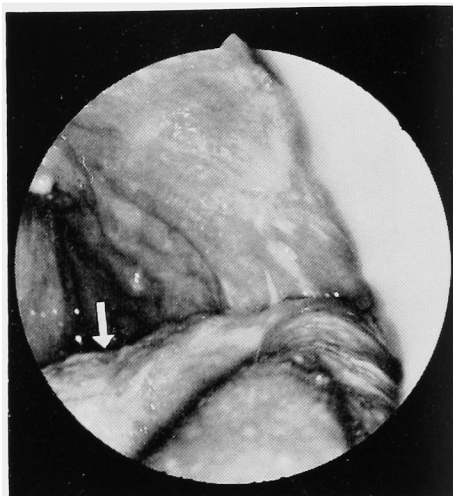


Fig. 6. Gross appearance of the tongue (after radiation therapy and chemotherapy). Tongue tumor disappeared macroscopically.

Table 1. 腎細胞癌の舌転移報告例.

報告者	年齢	性別	原発部位	舌転移部位	大きさ	治療	他の転移	転帰
1) Coenen	62	女	不明	舌根部	不明	生検	不明	3カ月
2) McNattin	58	男	左	舌左側部	小結節	なし	肺・心・皮膚	1カ月
3) Schrag	34	男	左	不明	直径2.5cm	切除	肺	5カ月
4) Der Carmen	77	男	左	舌根部	3×2.5cm	切除	なし	不明
5) 里 見	41	女	左	舌体部	1.7×1.3cm	なし	肺	1カ月
6) Friedlander	84	男	不明	舌先端	2 cm	切除	肺	3カ月
7) Fitzgerald	63	男	右	舌体部	不明	放射線	脳	3カ月
8) 北 尾	57	男	右	舌根部	直径3 cm	切除	骨	生存
9) 飯 尾	77	女	左	舌体部	3 cm	生検	肺	2カ月
10) 山 本	57	男	左	舌体部	小指頭大	切除	肺・小腸・結腸	生存
11) 自験例	42	男	左	舌根部	直径3 cm	放射線・化学	肺・骨	7カ月

なく、外国文献では、Coenen⁵⁾, McNattin⁶⁾, Schrag⁷⁾, Der Carmen⁸⁾, Friedlander³⁾, Fitzgerald⁹⁾, 本邦では、里見⁴⁾, 北尾¹⁰⁾, 飯尾¹¹⁾, 山本¹²⁾の報告をみるのみであった(Table 1)。

これらの症例についてみると、年齢は34歳から84歳(平均59.3歳)で、性別は男8例、女3例であった。原発部位では左腎7例、右腎2例と左腎が多い傾向がみられた。舌転移部位は舌根部4例、舌体部3例、舌左側部1例、舌先端部1例であった。舌転移腫瘍の大きさは2 cm から3 cm とかなり大きくなってからでないと発見されていない。治療は切除5例、生検のみ2例、放射線療法2例、治療なし2例であった。舌転移をともなう腎細胞癌の他臓器への転移は肺7例と多く、骨2例、脳、心、皮膚、腸各1例であった。舌転移が全身転移の一部であることが明らかである。予後は6カ月以内の死亡例が7例と不良な症例が大部分

であった。

腎細胞癌の転移の範囲を耳鼻科領域に広げてみると、里見⁴⁾は腎細胞癌の耳鼻科領域への転移を64例集計している。それによると、鼻腔、副鼻腔24例(38%)、咽頭8例(13%)が多く、舌転移はわずか3例(5%)であった。Bernstein¹³⁾によると鼻・副鼻腔の転移性腫瘍82例中40例(49%)と腎原発が最も多く、ついで肺10例、乳房8例、睾丸6例などの頻度が高かった。腎細胞癌の舌転移の症状は、出血、嚥下障害、呼吸困難、疼痛などで、特に腎細胞癌の転移の特徴は易出血性であるという^{3,4)}。

転移性舌腫瘍の確定診断は、生検を行ない組織学的検査を行なう必要がある。また、北尾¹⁰⁾によれば、舌転移巣がclear cell typeの場合は唾液腺原発のclear cell carcinomaとの鑑別が必要と述べている。さらに、Jacobs¹⁴⁾は腎細胞癌の転移巣は汗腺腫、血管

腫，皮脂腺腫，黄色腫と誤診されやすいことを指摘している。

治療方針は，里見らも述べているように他臓器への転移の有無・全身状態を考えて行なうべきであり，比較的ゆっくりした経過を示す腎細胞癌の場合，転移巣も切除し，われわれの症例のように非常に早い経過をとる症例では，保存的療法が良いと考えられた。

一般的に clear cell type の腎細胞癌は，化学療法や放射線療法に対して無効なことが多いが，われわれの症例のごとく pleomorphic type の腎細胞癌においては化学療法や放射線療法の有効性がうかがわれた。

結 語

舌転移をきたした腎細胞癌の1例を報告した。治療は放射線療法と化学療法の併用にて肉眼的に転移巣の消失を得たが，肺転移巣による呼吸不全のため舌転移発生後約7カ月で死亡した。

本論文の要旨は第38回日本泌尿器科学会四国地方会において発表した。

文 献

- 1) Weitzner S, Hentel W, Albuquerque NM: Metastatic carcinoma in tongue. *Oral Surg* 25: 278~281, 1968
- 2) Zegarelli DJ, Tsukuda Y, Pickren JW and Greene GW: Metastatic tumor to the tongue. Report of twelve cases. *Oral Surg* 35: 202~211, 1973
- 3) Friedlander AH and Singer R: Renal adenocarcinoma of the kidney with metastasis to the tongue. *JADA* 97: 989~991, 1978
- 4) 里見佳昭・松浦謙一・小川 英・森 豊：腎癌の耳鼻咽喉科領域（耳下腺，鼻腔，舌，歯肉）への転移症例。 *臨泌* 28: 611~616, 1974
- 5) Coenen H: Hypernephrom des Zungengrundes, Berl. Klin Wchnschr 51: 1626~1627, 1914
- 6) McNattin RF and Dean AL: A case of renal adenocarcinoma with unusual manifestation. *Am J Cancer* 15: 1570~1576, 1931
- 7) Schrag AR and Jordan FB: Unusual metastasis from hypernephroma. *Canad MAJ* 53: 168~169, 1945
- 8) Del Carmen BV and Korbitz BC: Oral metastasis from hypernephroma. *J Am Geriatr Soc* 18: 743~746, 1970
- 9) Fitzgerald RH, Mcinnes BK and Manry HC: Renal cell carcinoma involving oral soft tissues. *J Oral Maxillofac Surg* 40: 604~606, 1982
- 10) 北尾健二郎・渡辺 敬・宮村健一郎・石川 哮：舌根に転移した Grawitz 腫瘍の1症例。 *耳喉* 58: 67~70, 1986
- 11) 飯尾昭三・松本充司：腎癌舌転移の1例。第39回日本泌尿器科学会四国地方会，1986
- 12) 山本志雄・森岡政明・藤田幸利：腸管転移を認めた腎癌の1例。第39回日本泌尿器科学会四国地方会，1986
- 13) Bernstein JM and Montgomery WW: Metastatic tumors to the maxilla, nose, and paranasal sinuses. *Laryngoscope* 76: 621~650, 1966
- 14) Jacob H, Rubin MP and Lyon J: Renal cell carcinoma metastatic to the mandible and gingiva. *Oral Surg* 22: 649~653, 1966

(1986年8月8日受付)